

2009 年 7 月号 目次

【トピックス】

新型インフルエンザ情報	1
平成 20 年度 クラミジア抗体検査のまとめ	3
平成 20 年度 薬事検査について	4
残留農薬検査(その1)	5
医動物検査	7

【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 6月	9
感染症発生動向調査における病原体検査 6月	13

【検査結果】

由来別病原菌検出状況 6月	14
---------------	----

【情報提供】

衛生研究所 WEB ページ情報(21 年度 6 月分)	15
-----------------------------	----

新型インフルエンザ情報

2009年3月中旬に新型インフルエンザA(H1N1)が、メキシコと米国カリフォルニアで発生し、その後、2009年7月6日現在、世界135か国、患者数94,512人に拡大し、429人の死亡が確認されています(WHO発表世界の報告数)。

2009年6月11日には、WHOがフェーズを「6」にあげ、世界的大流行に入ったことを公式に認めました。

国内でも5月中旬以降、ウイルス拡大が全国的に認められ始め、厚生労働省は6月19日に対策内容を大幅に緩和(地域での重症患者対策を中心としたものに変更)しました。

横浜市では7月17日から、国の運用指針改定に伴い、季節性のインフルエンザと同様の対応に変更し、原則としてすべての一般医療機関で診療できるようにし、感染が疑われる人に実施していた遺伝子検査も、学校での集団発生が疑われる場合などに限定する事にしました。

新型インフルエンザA(H1N1)は、急な発熱や咳、咽頭痛などを主な臨床症状とする急性呼吸器疾患であり、季節性インフルエンザとほぼ同様の臨床像を示します。

夏に入っても北半球では、流行が継続しており、流行の終息の目途は立っていません。

一方、冬に入った南半球では、季節性インフルエンザの流行と共に、新型インフルエンザA(H1N1)の流行もおきています。

病原体に関する確定診断は、現時点では、ポリメラーゼ連鎖反応(PCR)による遺伝子検査によって得られています。

横浜市では、6月6日に、市内1例目の発生があり、7月16日現在(7月16日発表分まで)で232例の発生報告がありました。

性別の内訳は、男性122例、女性110例、年齢(0～64歳)の内訳は、10歳未満37.9%と一番多く、次に10歳代21.6%、20歳代が19.0%、30歳代が11.6%と、若い年齢層に多く見られています(表1、図)。

表1 性別・年齢別内訳

	男性	女性	計	%
10歳未満	48	40	88	37.9
10歳代	28	22	50	21.6
20歳代	21	23	44	19.0
30歳代	12	15	27	11.6
40歳代	7	8	15	6.5
50歳代	6	1	7	3.0
60歳代	0	1	1	0.4
計	122	110	232	100.0

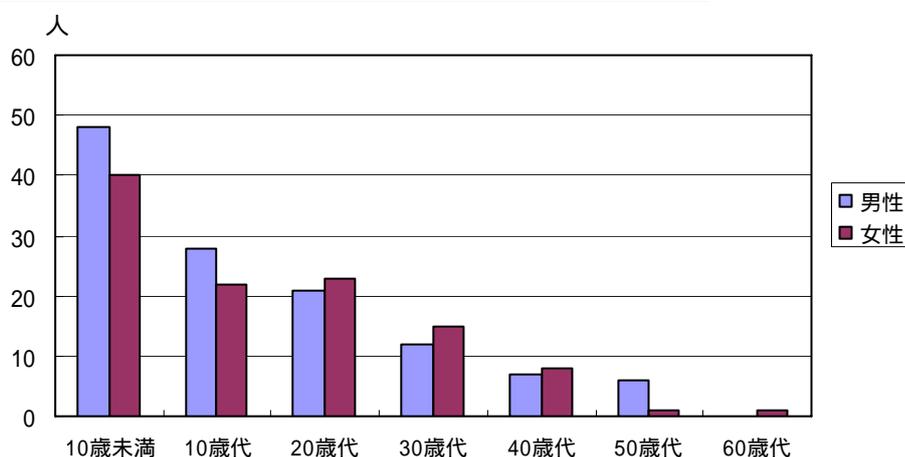


図 性別・年齢別内訳

症状は、発熱はあるものの、重症例はありません。

海外渡航歴は、有が53例(22.8%)でした(表2)。渡航場所は、ハワイが24例(45.3% 24/53)、アメリカ合衆国が13例(24.5% 13/53)と多く、ニュージーランド4例、オーストラリア、タイが3例でした(表3)。

表2 渡航歴

	人数	%
有	53	22.8
無	179	77.2
計	232	100.0

表3 渡航場所

	人数	%
ハワイ	24	45.3
アメリカ	13	24.5
ニュージーランド	4	7.5
オーストラリア	3	5.7
タイ	3	5.7
フィリピン	2	3.8
カナダ	1	1.9
ニューヨーク	1	1.9
バリ島	1	1.9
ロンドン・パリ	1	1.9
計	53	100.0

7月17日現在、横浜市衛生研究所で4月28日以降、新型インフルエンザに関連した検査を1,079件行いました。

インフルエンザウイルスの検出数の内訳は、新型インフルエンザA(H1N1)240件、AH1(ソ連型)4件、AH3(香港型)111件でした。

今後、日本を含む北半球では、冬に新型インフルエンザA(H1N1)の大流行が懸念されています。

ハイリスク者(小児喘息、免疫抑制剤・抗がん剤使用者、糖尿病で合併症を保有している者、慢性心疾患・肺疾患保有者、妊婦)は、感染すると、季節性インフルエンザ以上に重篤化しやすいと言われておりますので、注意が必要です。

予防対策としては、現在のところ、新型インフルエンザを予防するためのワクチンは存在しません。

厚生労働省によると、秋以降の「第2波」に備え、7月中旬にワクチン製造を始め、10月には接種を開始する予定です。また、1,500万～2,000万人分を輸入でまかなう考えを明らかにしました。

最新情報は「横浜市新型インフルエンザ対策本部からのお知らせ」

<http://www.city.yokohama.jp/me/anzen/kikikanri/influenza/> をご覧下さい。

【 感染症・疫学情報課 】

平成20年度 クラミジア抗体検査のまとめ

近年、特に若年者の中でAIDSやクラミジアなどの性感染症が増加しており、その予防啓発の一環として平成13年度よりHIV検査と合わせてクラミジア・トラコマチス抗体について無料匿名検査を実施しています。平成20年度は7か所の福祉保健センターとAIDS市民活動センターで週1回行っている夜間健診、結核予防会で行っている土曜健診の計9か所で採取された血清を試料とし、ペプタイドクラミジアIgA及びIgG(明治乳業製)を用いて検査を実施しました。

平成17年度から平成20年度までのクラミジア抗体検査受診者数と陽性者数、陽性率を表1に示しました。平成17年度はHIV即日検査の導入に伴い、結果が出るまでに1週間かかるクラミジア検査は受診者が減少したと考えられます。しかし、その後福祉保健センターでの受診者増加がみられましたが、平成20年度は19年度と比べ受診者数が若干減少しました。

表1 平成17年度～平成20年度の受診者数と陽性者数と陽性率

年度	受診者数(人)	陽性者数(人)*	陽性率(%)
平成17年度	1689	501	29.7
平成18年度	2117	713	33.7
平成19年度	2411	756	31.4
平成20年度	2198	683	31.1
計	8415	2653	31.5

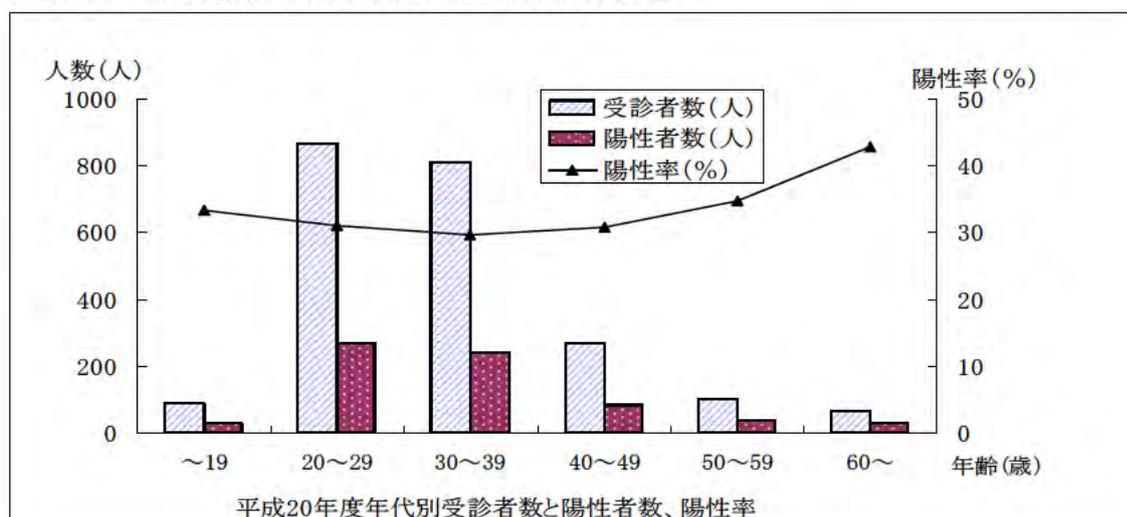
* IgA、IgGいずれかが(±)以上のものを陽性とした

平成20年度の男女別受診者数、陽性者数と陽性率を示しました(表2)。受診者数は男性が女性の約1.5倍と多いですが、例年どおり陽性率は女性のほうが高い傾向にありました。

表2 平成20年度 男女別受診者数、陽性者数と陽性率

	受診者数(人)	陽性者数(人)	陽性率(%)
男性	1310	327	25.0
女性	888	356	40.1
合計	2198	683	31.1

平成20年度の年代別受診者数と陽性者数及び陽性率について以下の図に示しました。20歳代、30歳代の受診者が多く、陽性率は各年代とも30%前後でした。



【 細菌担当 】

平成20年度 薬事検査について

平成20年度は健康福祉局医療安全課等の依頼により、薬局製剤*、いわゆる健康食品及び健康被害事例の原因究明等について検査を実施しました。

1 医薬品検査

本年度は医療安全課の試買により、横浜市内の薬局で製造販売されている薬局製剤「感冒剤13号A」3検体について、重量偏差試験並びにアセトアミノフェン、エテンザミド、マレイン酸クロルフェニラミン、dl-塩酸メチルエフェドリン、カフェイン、リン酸ジヒドロコデインの確認試験及び規格試験を行いました。その結果、いずれの試験についても適合しました。

2 いわゆる健康食品等の検査

本年度は、医療安全課の試買により「ダイエット」、「痩身」等を標榜し、肝機能障害等が問題となる「いわゆる健康食品」15検体について、センナ、フェンフルラミン、N-ニトロソフェンフルラミン、エフェドリン類及び甲状腺ホルモンの検査を行いました。その結果、いずれの成分も検出されませんでした。

また、試買により強壮効果を標榜する「いわゆる健康食品」12検体について、シルデナフィル、タダラフィル、バルデナフィル、ホンデナフィル、キサントアントラフィル、チオキナピペリフィル、メチルテストステロン及びヨヒンピンの検査を行いました。その結果、いずれの成分も検出されませんでした。

3 健康被害に係わる検査

医療安全課の依頼により、医療機関から寄せられた健康被害4事例5検体の原因究明検査を行いました。その結果、中国製強精・強壮用健康食品による低血糖症状を示した2事例のうち、1事例1検体からシルデナフィルとグリベンクラミドを検出しました。もう一方の事例からは、シルデナフィルのみが2検体から検出されました。

これら有症事例のうち検出成分と健康被害症状の因果関係が明らかになった事例については、医療安全課で記者発表し、市民への注意喚起を行いました。

また、厚生労働省へ連絡し、厚生労働省ホームページにも掲載されました。なお詳細は、当所の薬事情報ホームページ(http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/yakuzi_inf)を参照して下さい。

* 薬局製剤とは

薬事法第22条薬局における製造販売の特例において、薬局開設者が当該薬局における設備及び器具を持って製造することができる医薬品のことで、現在は約400品目あります。

【 薬事担当 】

残留農薬検査(その1)

当所では、横浜市内に流通する農作物や食肉等の食品に残留する農薬について検査を行っています。平成18年5月に施行されたポジティブリスト制度に伴い、現在では有機リン系農薬、有機塩素系農薬、ピレスロイド系農薬及び有機窒素系農薬の約90項目について検査を行っています。

今回は平成21年4月から5月末日までに行われた検査結果を報告します。

1 国内産農作物

食品専門監視班から5月に搬入されたアスパラガス、チンゲンサイ及びレタス(各3検体、計9検体)について残留農薬検査を行いました。その結果を表1に示します。チンゲンサイ1検体からアセタミプリド*1が検出され、別の1検体からシペルメトリン*2が検出されました。ただし、検出された農薬について残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示します。

表1 国内産農作物の残留農薬検査結果 (H21年4月～5月末日)

農作物	産地	検査 検体数	農薬検出 検体数	検出農薬名	検出値 (ppm)	基準値 (ppm)
国内産農作物						
アスパラガス	国産	3	0			
チンゲンサイ	国産	3	1	アセタミプリド	0.03	5 以下
			1	シペルメトリン	0.32	5.0 以下
レタス	国産	3	0			

表2 農薬の検査項目及び検出限界(92項目)

農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)
有機リン系農薬					
EPN	0.01	ジクロフェンチオン	0.01	フェンクロルホス	0.01
イソフェンホス	0.01	ジメチルビンホス	0.01	フェンスルホチオン	0.01
イプロベンホス	0.01	ジメトエート	0.01	フェンチオン	0.01
エチオン	0.01	スルプロホス	0.01	フェントエート	0.01
エトプロホス	0.005	ダイアジノン	0.01	ブタミホス	0.01
エトリムホス	0.01	テトラクロルビンホス	0.01	プロチオホス	0.01
カズサホス	0.01	テルブホス	0.005	プロパホス	0.01
クロルピリホス	0.01	トルクロホスメチル	0.01	ホサロン	0.01
クロルピリホスメチル	0.01	パラチオン	0.01	マラチオン	0.01
クロルフェンビンホス	0.01	ピペロホス	0.01	メチダチオン	0.01
シアノフェンホス	0.01	ピリダフェンチオン	0.01	メチルパラチオン	0.01
シアノホス	0.01	ピリミホスメチル	0.01	メビンホス	0.01
ジオキサベンゾホス	0.01	フェントロチオン	0.01		

表2の続き

農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)
有機塩素系農薬					
BHC (α, β, γ 及び δ の和)	0.005	クロルフェナピル	0.01	トリアジメホン	0.01
γ -BHC(リンデン)	0.002	クロルフェンゾン	0.01	プロシミドン	0.01
DDT (DDE,DDD,DDT の和*)	0.005	ジクロラン	0.01	プロピザミド	0.01
アルドリン及び ディルドリン	0.005	ジコホール	0.01	プロモプロピレート	0.01
エンドスルファン (α, β の和)	0.005	テトラジホン	0.01	ヘプタクロル (エポキシドを含む)	0.005
エンドリン	0.005				
ピレスロイド系農薬					
アクリナトリン	0.01	デルタメトリン及び トラロメトリン	0.01	フェンプロパトリン	0.01
シハロトリン	0.01	ハルフェンプロックス	0.01	フルシトリネート	0.01
シフルトリン	0.01	ビフェントリン	0.01	フルバリネート	0.01
シペルメトリン	0.01	フェンバレレート	0.01	ペルメトリン	0.01
テフルトリン	0.01				
有機窒素系農薬					
アセタミプリド	0.01	テトラコナゾール	0.01	ブタクロール	0.01
イソプロカルブ	0.01	テブコナゾール	0.01	フルジオキシニル	0.01
エスプロカルブ	0.01	テブフェンピラド	0.01	フルトラニル	0.01
カフェンストール	0.01	トリアジメノール	0.01	プロメカルブ	0.01
クレソキシムメチル	0.01	ピリプチカルブ	0.01	ヘキサコナゾール	0.01
クロルプロファミ	0.01	ピリプロキシフェン	0.01	ペンコナゾール	0.01
シメトリン	0.01	ピリミノバックメチル	0.01	メトラクロール	0.01
チオベンカルブ	0.01	フェナリモル	0.01	メトリブジン	0.01
チフルザミド	0.01				

※ DDTはp,p'-DDE、p,p'-DDD、o,p'-DDT及びp,p'-DDTの和

【解説】

*1 アセタミプリド

有機窒素系農薬に該当し、主に『モスピラン』という商品名で各農薬メーカーにより一般的に販売されています。広く使われている有機リン系農薬などに対して効きにくくなった多くの害虫に対しても有効的に作用する農薬です。

*2 シペルメトリン

ピレスロイド系農薬に該当し、主に『アグロスリン』という商品名で各農薬メーカーにより一般的に販売されています。有機リン系農薬などに対して効きにくくなった多くの害虫に対しても有効的に作用する農薬です。また耐雨性及び耐光性に富み、長い残効性があります¹⁾。

【文献】

1) 社団法人日本植物防疫協会、農薬ハンドブック2001年版、88-90

【 微量汚染物担当 】

医動物検査

医動物室における平成21年4～6月の検査件数を表に示しました。

【行政検査:福祉保健センター、市場食品衛生検査所など行政からの依頼】

食品中異物検査が1件(はいが食パンに混入したタバコシバンムシ)、種類同定検査が8件(ミツモンハチモドキバエ、ヤマトシロアリの有翅虫、ニセセマルヒョウホムシ、マダニ科、キアシドクガ、マドチャタテ科、アヤトビムシ科、プラスチック片)でした。

ウエストナイル熱媒介蚊調査のために、市内公園や港湾地区などで週に1回ライトトラップを用いて採集された蚊を分類同定しました。6月中に3回(1回10定点)調査を行いました。期間中に採集された蚊は、6属10種、286個体(雄を含む)でした。本調査は10月下旬まで継続実施します。

【依頼検査:市民、事業者からの有料依頼】

種類同定検査が2件(ハサミムシ目の一種、コバエ類の幼虫および蛹殻)でした。

【その他:感染症媒介昆虫等の市内における生息状況を把握するために行う調査や市民からの問い合わせ等】

中区、磯子区、南区でライトトラップを用い、週に1回飛翔昆虫調査を行いました。4～6月中に41定点の調査を行いました。

また、中区の5飲食店、51定点で粘着式トラップによるチャバネゴキブリの生息状況調査を実施しました。4～6月中にのべ601ヶ所の調査を行いました。

感染症媒介昆虫調査の一環として、磯子区(11回:330ヶ所)において雨水枡における蚊幼虫調査および粘着式トラップを用い、飛翔昆虫調査を行いました。

検査試験項目	平成21年			平成21年	
	4月	5月	6月	4～6月	
行政検査	種類同定検査		5	3	8 件
	食品中異物検査		1		1 件
	ウエストナイル熱蚊検査				
	採集地点数			30	30 定点
					286 個体
依頼検査	種類同定検査	2			2 件
	食品中異物検査				0 件
	発生状況調査(ダニ類)				
	調査回数				0 件
	個体数				0 個体
	殺虫剤効力試験				0 件
その他	ゴキブリ調査	183	225	193	601 カ所
	飛翔昆虫調査	14	12	15	41 定点
	その他の調査等	120	160	160	440 件
	問い合わせへの回答	17	18	30	65 回

検査試験項目等 解説

種類同定検査

福祉保健センター、市民、事業者などから依頼のあった昆虫・ダニ類の種を調べます。種が明らかになることにより、生態等が判明し、その発生時期、発生場所、害の有無などに基づいて駆除の必要性、駆除方法、予防法などが明らかになります。

食品中異物検査

福祉保健センター、市民、事業者などから依頼のあった食品に混入した昆虫の種を調べます。種が明らかになることにより、生態等が判明し、混入経路を推定する一助となります。

ウエストナイル熱媒介蚊調査

健康福祉局の「ウエストナイル熱対策事業」におけるウエストナイルウイルスの調査を行っています。種ごとのウイルス保有状況を調べるため、市内公園や港湾地区などで採集された蚊を分類同定します。なお、採集した蚊についてはウイルス担当において、日本脳炎ウイルスの検査も合わせて行っています。

ダニ類等発生状況調査

市民からのかゆみや虫刺されの相談に基づいて、必要に応じて、住宅内でのダニ検査を行います。ダニ発生の有無を調べ、発生している場合には人を刺すダニであるかなどの検査を行います。

殺虫剤効力試験

新しく開発された防疫用殺虫剤の効力試験を、室内(基礎)および野外(実地)で行います。

ゴキブリ調査

実際に営業している飲食店におけるゴキブリの生態を把握するため、また殺虫剤の実地効力試験の予備調査として、ゴキブリ生息状況調査を行っています。

飛翔昆虫調査

ライトトラップを用い、時期ごとに大量発生している昆虫類等の発生状況や感染症媒介昆虫である蚊類成虫を中心とした飛翔昆虫の発生状況を調査しています。

その他の調査等

21年度は、雨水枡内での蚊、その他の害虫の生息状況調査を行っています。

問い合わせ

市民の方などから相談のあった、昆虫・ダニ一般、昆虫媒介性疾病、殺虫剤などに関する不安、疑問に回答、助言、指導をします。



そろそろ、出番です！！
少しの水たまりでも育つ、タフな蚊です。

写真:ヒトスジシマカ幼虫

【 医動物担当 】

感染症発生動向調査委員会報告 6月

今月のトピックス

- 新型インフルエンザが市内で26例報告されました(6月24日現在)。
- 伝染性紅斑が過去5年間で最も高い水準です。
- 手足口病、ヘルパンギーナといった夏の感染症が増えてきました。

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:84か所、内科定点:55か所、眼科定点:15か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計183か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計139定点から報告されます。

平成21年5月18日から6月21日まで(平成21年第21週から第25週まで。ただし、性感染症については平成21年5月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成21年 週 - 月日対照表

第21週	5月18～24日
第22週	5月25～31日
第23週	6月1～7日
第24週	6月8～14日
第25週	6月15～21日

全数把握の対象

< 新型インフルエンザ >

6月6日に、市内1例目の発生があり、6月24日現在で26例の発生報告があります。性別の内訳は、男性11例、女性15例で、年齢の内訳は、10歳未満が6例、10代が4例、20代が5例、30代が6例、40代が3例と、50代が2例と若い人が多くなっています。海外渡航歴のあるものが17例です。重症例はありません。全国では、24日現在944例の報告があります。また、横浜市衛生研究所で4月28日以降に新型インフルエンザに関連した検査を542件行いましたが、インフルエンザウイルスの検出数の内訳は新型インフルエンザ27件(1件は横浜市外)、AH1(ソ連型)4件、AH3(香港型)102件となっています。

(横浜市新型インフルエンザ関連情報 <http://www.city.yokohama.jp/me/anken/kikikanri/influenza/>)

< 麻しん >

2009年6月は24日現在で1例の報告があり、予防接種を1回受けていました。

ひと月で100例以上の報告があった2008年に比べてかなり少なくなっていますが、未だ患者発生がありますので、予防接種を1回受けていても、麻しんにかかっていない方は予防接種を生涯2回受けることが大切です。

2012年の麻しん排除に向けて、予防接種の徹底が最も大切です。

(日本は、2008年～2012年の5年間で、麻しん排除を目指します)

風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握

1歳および就学前1年間の、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種の徹底

5年間に限り、中1及び高3相当の年齢の者への定期接種を実施

(国立感染症研究所ホームページ <http://idsc.nih.gov.jp/disease/measles/index.html>)

< 腸管出血性大腸菌感染症 >

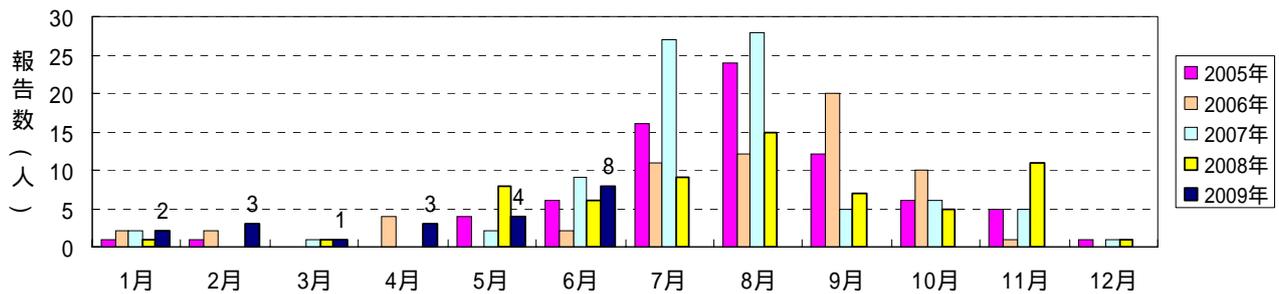
6月の報告数は、24日現在で8例です。今年に入って21例の報告があり、血清型の内訳はO157が12例、O26が2例、O111が2例、O121が2例、O145が1例、O103が1例、不明が1例で、性別の内訳は、男性14例、女性7例で、年齢の内訳は、10歳未満が4例、10代が8例、20代が1例、30代が3例、40代が2例、60代が3例と、10代がもっとも多くなっています。毎年、夏に報告が多くなりますので、注意が必要です。

例年牛レバー等の生食による感染が見られます。

啓発用チラシ「O157に注意しましょう」

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf>

腸管出血性大腸菌感染症月別報告数



定点把握の対象

< (季節性)インフルエンザ >

今シーズンは、過去5年間で最も流行開始が早かった昨シーズンに次いで早く、2008年第49週に流行の目やすとなる「定点あたり報告数1.0」を超え、2009年第4週に流行のピークとなりましたが、第9週から再び増加に転じ、第11週にもピークとなり、二峰性となりました。第25週は定点あたり報告数は0.08となりました。報告のあったのは6区のみです。川崎市は0.07、神奈川県(横浜、川崎除く)は0.10、全国は0.24でした。

迅速診断用検査キットによる型別の集計では、第4週をピークに減少し第25週にはA型3件(うち新型インフルエンザ1件)、B型3件の報告です。

< A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 >

昨年は、過去5年間で最も高い水準で推移していました。今年に入ってから例年並みの水準ですが、第25週は2.61と高めで推移しており、注意が必要です。行政区別では港北区(8.57)が高く、次いで保土ヶ谷区(5.40)、瀬谷区・都筑区(4.00)となっています。川崎市は2.27、神奈川県(横浜、川崎除く)は1.92、全国は1.99でした。

< 手足口病 >

第25週は定点あたり0.79と、増加の兆しが見られます。例年夏にかけて増加してくることから、今後の動向に注意が必要です。川崎市は0.61、神奈川県(横浜、川崎除く)は0.10、全国は0.36と、いずれも横浜市より低い値です。

< 伝染性紅斑 >

例年並みの水準で推移していましたが、第13週から増加し、第25週は定点あたり1.44と、過去5年間で最も高い水準で推移しています。川崎市は2.12でした。全国では、過去5年間の同時期と比較して低い水準で推移していて、第25週は定点あたり0.22でした。例年、6月頃が一番高いようですので、今後の動向には注意が必要です。

< ヘルパンギーナ >

第25週は定点あたり0.60と、増加の兆しが見られます。川崎市は0.36、神奈川県(横浜、川崎除く)は0.25、全国は0.41と、いずれも横浜市より低い値です。例年、6月末～7月にピークを迎えるため、これからの季節は注意が必要です。

< 性感染症 >

性感染症は、産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。5月は、4月に比べて全体としては横ばいです。19歳以下の若年層については、すべて女性で、性器クラミジア感染症が3例、尖圭コンジローマが2例、淋菌感染症が1例でした。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:4か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

< ウイルス検査 >

2009年6月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点44件(鼻咽頭ぬぐい液37件、糞便2件、直腸ぬぐい液3件、吐物1件、扁桃の膿1件)でした。患者の臨床症状別内訳は、気道炎34人、胃腸炎(下痢・嘔吐含む)6人、手足口病2人、突発性発疹1人、アデノ感染症1人でした。

7月10日現在、気道炎患者1人からアデノウイルス2型、別の気道炎患者1人とアデノ感染症患者1人からアデノウイルス(型未同定)、手足口病患者1人からエンテロウイルス71型が分離されています。これ以外にPCR検査では、気道炎患者4人からヒューマンメタニューモウイルス、気道炎患者2人からエコーウイルス18型、胃腸炎患者1人からノロウイルスG2型、手足口病患者1人からコクサーキーウイルスA16型とヒューマンメタニューモウイルスが検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

6月の感染性胃腸炎関係の受付は菌株が2株で腸管病原性大腸菌1件検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は11件でA群溶血性レンサ球菌が8件から検出されました。

感染症発生動向調査における病原体検査4月

感染性胃腸炎

2009年4月

検査年月	4月		2009年1～4月	
定点の区別	小児科	基幹	小児科	基幹
件数	7	9	7	26
菌種名				
サルモネラ				
腸管病原性大腸菌		1		1
毒素原性大腸菌		1		1
組織侵入性大腸菌				
腸管出血性大腸菌				
腸管凝集性大腸菌				
黄色ブドウ球菌				
カンピロバクター				
不検出	7	7	7	24

呼吸器感染症等

2009年4月

検査年月	4月		2009年1～4月	
定点の区別	小児科	基幹	小児科	基幹
件数	7	1	35	2
菌種名				
A群溶血性レンサ球菌	T1	1	2	
	T2		1	
	T3		2	
	T4	1	2	
	T12	4	10	
	T13			
	T25			
	T28		3	
	T B3264		1	
	T 型別不能		2	
B群溶血性レンサ球菌			1	
G群溶血性レンサ球菌				
黄色ブドウ球菌				
髄膜炎菌				
インフルエンザ菌		1		1
肺炎球菌				1
不検出	1	0	11	0

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

[細菌担当]

感染症発生動向調査における病原体検査6月

感染性胃腸炎

検査年月	6月		2009年1～6月	
定点の区別	小児科	基幹	小児科	基幹
件数	1	2	11	36
菌種名				
サルモネラ				1
腸管病原性大腸菌		1		1
毒素原性大腸菌				2
組織侵入性大腸菌				
腸管出血性大腸菌				1
腸管凝集性大腸菌				
黄色ブドウ球菌				
カンピロバクター			2	
不検出	1	1	9	31

呼吸器感染症等

検査年月	6月		2009年1～6月	
定点の区別	小児科	基幹	小児科	基幹
件数	11		52	2
菌種名				
A群溶血性レンサ球菌	T1	1	3	
	T2		1	
	T3	4	8	
	T4	1	5	
	T6	1	1	
	T12	1	12	
	T13			
	T25		1	
	T28		3	
	T B3264		1	
	T 型別不能		2	
B群溶血性レンサ球菌			1	
G群溶血性レンサ球菌				
黄色ブドウ球菌				
髄膜炎菌				
インフルエンザ菌				1
肺炎球菌				1
不検出	3		14	0

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【細菌担当】

由来別病原菌検出状況 6月

検体の種類	分離菌株数					
	ヒト		環境		食品	
	糞便、尿、咽頭ぬぐい液、 喀痰等 菌株による依頼を含む		河川水、河川底泥等		食品、食品容器等のふきとり、 飲料水等	
	6月	2009年1-6月	6月	2009年1-6月	6月	2009年1-6月
件数	148				86	
菌種名						
コレラ O - 1						
O - 1以外	1					
赤痢菌 A						
B						
C						
D	6					
その他	1	2				
チフス菌						
パラチフスA菌	1					
その他のサルモネラ						
O4群						
O7群	1					
O8群						
O9群						
O3,10群						
その他						
腸管病原性大腸菌	1	2				
毒素原性大腸菌					2	
組織侵入性大腸菌						
腸管出血性大腸菌	8	20				
腸管凝集性大腸菌						
腸炎ビブリオ						
黄色ブドウ球菌	7	20				
カンピロバクター	17 *	27			1	
ウェルシュ菌			11			
A群溶血性レンサ球菌	8	37				
B群溶血性レンサ球菌			1			
レジオネラ			1			
セレウス菌						
インフルエンザ菌			1			
肺炎球菌			1			
その他						

* *Campylobacter jejuni*

【細菌担当】

衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 21年度5月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 21年度6月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、1998年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

2008年4月、市民にわかりやすくかつ迅速な情報提供を目指して、リニューアルを行いました。

今回は、2009年5月のアクセス件数、アクセス順位及び2009年6月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については行政運営調整局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (2009年5月)

2009年5月の総アクセス数は、217,649件でした。主な内訳は、感染症58.3%、食品衛生13.8%、保健情報7.0%、検査情報月報3.0%、生活環境衛生1.8%、薬事1.5%でした。

(2) アクセス順位 (2009年5月)

5月のアクセス順位(表1)は、第1位が「トップページ」、第2位が「マイコプラズマ肺炎について」、第3位が「横浜市感染症情報センター」でした。

2009年4月にメキシコやアメリカで新型インフルエンザが流行し始め、「トップページ」に「[新型インフルエンザ] に対する対応について」を掲載した事により、アクセス数が増加したものと考えられます。その後、5月上旬には国内で、新型インフルエンザの患者が確定され、10位以内に「新型インフルエンザ」関連の感染症情報の項目が7つ入り、感心の高さが伺われました。横浜市の発生状況(本誌 ページ参照)。

第5位に「ビブリオ・バルニフィカス感染症について」が入りました。これは、5月にテレビ報道された事による影響と思われます。ビブリオ・バルニフィカスは食中毒菌である腸炎ビブリオやコレラ菌と同様にビブリオ属に分類される菌の名前です。「人食いバクテリア」とも呼ばれ、ビブリオ・バルニフィカスが付着した魚介類を生で食べたり、傷口からの感染などが原因で発症します。

菌は西日本を中心に温かい海水中に幅広く生息するとみられ、毎年6～9月に発生のピークを迎えます。潜伏期間は数時間から2日間です。

初発症状は発熱と激しい痛みで、ほとんどの患者に皮疹が認められます。その皮疹は多彩で、紅斑、紫斑、水疱、血疱、潰瘍などが混在し、また短時間で皮疹が変化します。このような症状が認められた場合には、直ちに医療機関を受診する事が必要です。

免疫機能が減弱している人や、肝硬変、肝臓がんなど肝臓疾患のある人、鉄欠乏貧血などで鉄剤を内服している人等は、肝臓でのクリアランスの低下や、血清鉄が細菌の病原性や増殖性を増すことなどから、

表1 2009年5月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	トップページ(「[新型インフルエンザ] に対する対応について」を掲載)	20,722
2	マイコプラズマ肺炎について	10,209
3	横浜市感染症情報センター	6,244
4	インフルエンザ情報	5,038
5	ビブリオ・バルニフィカス感染症について	3,571
6	感染症発生状況	3,417
7	臨時情報	3,099
8	新型インフルエンザ A/H1N1	2,898
9	百日咳について	2,892
10	新型インフルエンザについて	2683

データ提供: 行政運営調整局IT活用推進課

細菌が血液中に侵入し、潜伏期の後、蜂巣炎等の皮膚病変の拡大や、発熱、悪寒、血圧の低下などの敗血症様症状を起こし、生命を脅かすことがあります。

予防方法としては、基礎疾患を持つ人は、特に夏場における海産魚介類の生食は避け、適切に加熱調理したものを摂取することが重要です。なお、ビブリオ・バルニフィカスは、通常の調理温度(腸管出血性大腸菌O157:H7を殺す温度)である食品の中心温度が70 で1分間(100 であれば数秒間)加熱すれば死滅します。

また、手足に傷のある人は6～10月に海水に入らないことにより予防することが可能です。

健康な人では、軽度の胃腸炎を起こすことがありますが、重症になることはほとんどなく、過敏になる必要はありません。

(3) 電子メールによる問い合わせ (2009年6月)

2009年6月にホームページのお問い合わせフォームを通していただいた電子メールによる問い合わせの合計は、7件でした(表2)。

表2 2009年6月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
DPD試薬について	1	衛生研究所
土壌検査について	1	衛生研究所
水道水を乾かした後の粉について	1	衛生研究所
蚊らしき生物について	1	衛生研究所
着色料について	1	衛生研究所
感染症発生届について	1	衛生研究所
エアコン内のゴキブリについて	1	衛生研究所

2 追加・更新記事 (2009年6月)

2009年6月に追加・更新した主な記事は、8件でした(表3)。

表3 2009年6月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
6月1日	紫外線と皮膚・眼について	更新
6月1日	感染症に気をつけよう(6月号)	追加
6月8日	破傷風について	更新
6月8日	百日咳について	更新
6月9日	英字略語集(ABC順)	更新
6月17日	熱中症(熱射病、日射病)を予防しましょう	更新
6月25日	横浜市における麻しん患者届出状況 (2009年)	更新
6月29日	高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)の発生状況	更新

【 感染症・疫学情報課 】